華つみ

下局

既七月十九日

1499

華摘

一灯礼　其の用述

六月朔日

自雪之墨寺のうれやつ四士侍
るかぶと家よ冷の氷餅　溪石

遊濟州海寺

つのうとの鴨とい舟乃人の汗　治德

二月　所見

誰か家の星の川邊乃涼ミ哉　角

棄（バイ）あつて踏こゝろよし螢哉　巳百

中宿乃月に掛らる螢の夜　曲水

藻や魂なき淀川すぢて　紫雲

其ひとへ冬ハ恨んゆるさ哉　万四

三月

巳風亭

水うてや蟬も雀をぬらし行　角

おそれや蚊の声ある竹の隈　巳風

三ヶ月に涼てふしぎな隠居かな　溪石

うれしくと庭に九ツや三日の月　巳百

此秋乃むり脚て
いつくに足向まじる

白川乃流に分れゆく螢　同

遊女小むらさきをくせて
讃このまれしけ

藻乃花や繪に書てけふさそふ　角

涼しくと海ゟ涼る八日の月　金鳳

四日

髪かそよ草乃はるかぬ涼み哉　鉄蕉

白雨はたゝ狗笑ふ樹の梢 鉄蕉

西行を目もとに二つ夏の雲 幽也

五月

祇園日次の記とりあつめ

河貿頃徳利をひたす流れ 角

蓑山や奄とゝりて二曲り 曲水

六月

なまけて居る蟲 同

石山寺

男郎花一枝寢ぬる春の山 近江 とよ

祇園会をとゝのへて

七月

京都

祇園会をとゝのへて

於乃葉を青水に浮かべ 角

鮮なる人のきりなる 武 同

25

涼暑 茶の殻くさる後 ト宇

鵲の八ゆきさる夏の暑 紫雪

八月

母乃月や又泣かせまくは風 角

花つゝの中へ 僧

その母子逆流蟬の声 已百

憶子ヲ

梨ノ花さくころ巳ノ実のうるを　妓童　梨水

二月や海ぶ柿の木ばかの通り　越人

翁かの一文字の都の涼しさよ
ぶらぶらよりもものせて
あるくはやしもしめて

九月

丈山の庵ぬるあと涼しさ　角

日の陰や無ふるの代ノ三面巴山

秋ちかのとよさ鳴ちかき　木平賣　同

寂しさ　ものうる家の暑ノ　氷花

父涼し似合ぬ僧の尤ものう　竹井

もを替へうるを案ともめし　池の雪

曲水ノ旅宿を訪ふ

湖水をかなしひかしに

十月

連ねあるを表をあひしノ　角

やし草菴を

人〳〵ひきる

ものしやば烟代ノ氷魚を　賣てかな　翁

法華一本門の心ぞ

雨露ハ天ノ漏ぬ　車論下

花ノ雨　非人

麻ちをきとりて句に結縁
よりて
追善とうくはしく我毋の
之翁為に且又　こをいたして
誰人はなの花の去と中
しを未來記ゆへ

十一月　ふの粉ゆ地乃地ゆ扇乃地　角

十二月　夕藥師ゆじきゆの誓ゆ　同

十三月　幷天王を御旅所

十四月　星乃子乃宿宮（ミヤ）ゆ鼓ゆ　同

蒲の穂や蟬を雇（やとい）へ　同

引汐ゆ動ゆ舟乃暑（サ）乃地　百里

場乃乃花を登乃の雫ゆ　妙延寺乃可

十五月　城入や時乃流乃土用干　角

十六月　怖夢（フシロレキ）を見へ

切うし寄乃蓑ハ城の蚤の跡　同

衣食住乃三ツハ何も
うん じ ぼん 紀大草庵
茅舎ハ安房の国 長誤
〻 天命知命と
いへれども 山川

酸 ある歯を梅賣る老の洞の中
苦 筋根張るうき世の味や路の草
辛 井乃底の蛇を忘るゝ夏いちご
鹹 百草(モヽ)を蒸(ミ)て実ぐさハ著(イチレン)
なりひく揺るや仮ゝの世

十七日

癸亥 雲乃あるや水 角

環寡

蠹乃巣や千スゝめの姉ゝ 連曙

ぬき石る猫の昼寝の暑サ�… 寒蟬

十八日

抱(ダキ)筆や妾(メカケ)うえん きのふ 角

次乃和は結句不拘子の躍 三井 笑種

京まいふう

犬蓼の柳原こえ五條ふき　舟竹

蝿ばらひの杭乃眠うめ　巳百

伊勢の国すゝ狐の

人つまをこえかけ句

仁あまをこえをとめ木目　水

はゝ狐つき日比乃田吏まくを

まこと狐いまくなはこを

なりとし其筆　法正

しゝ狐まくゝ仕きぐ分り

あつしくゝえめゝ立めしま

をとゝ半付仕る

元禄元年七月の津々

十九日

月出て夜ふけまくゝ涼水　角

紗乃切こゝ螢つゝん島郊山　筍深

何云て家のれ出るこゝ舟　枳風

十月

夕鳥や白き鶏垣根ゝり　角

秋色つるゞへかゝひ立る

剃こゝ餞別　筆

つひ立ゝ杜乃花　曲水

難波江にて

なくさらくつ角出て濱の路通

市中の光陰はことしくるしきかなと

十一日

秋の日さらら太鼓や隻樂　角

佛めさくんかうの蓮の秋　女

十二日　鉢(マケカヘ)　鐘を背よ暑し田州丸　角

十三日　煙雨村

夕ぐれや洗ひ金ける土のうら　角

ゆのうらや炊く煙をつま行　百里

魚の後白雨すぐ町屋川　遠水

十四日

十五日

十六日　後の後室よりやくるのまこと角

あよ国のつのさはすひうの角

不奪百姓膏腴とは

文選のことゝ

百姓の志ぶる沖を一番白　角
木戸番をあられむ

蟬ぶきけ一日晴て秋の露　同
蚊の声を悪しと聞ばかなしき　由之
炭釜の蚊の色こまるタ方　臺次
つまびらか勧めて色の極ぶ　賤水
常稽古られより　隻の亭　仙化

十七日　豊年

ぬる味噌なる○を洗ん瓜摩　角
白雨の京へ捨る黄菓ぶ　友五

廿八日　雨中吟

夕立る獨活の香さ匂ぶ　角

廿九日　白うり濱出ば

御松ぬる貝とる出汐を聲よる　同

晦日

隻稼御師の宿札○ぬる　同

物くさと花火かうまぬ涼み哉　三井　笑種

木の下は蛍ともるく蛍の月　莫陵

七夕の雲もてかしやかり衣　松風

心非心是

よしあしをいとて　定良

誉よよ若葉小

乃る人と真似笑ふも涼小　鄉立

うの音を春み柳や岸を築　防風

七月朔日

又の世ときをんをと
聞くやうりぬるれり
いなみうるに舎るよびて
ろれてはの句を口出れい
一杯るる程と心よと
いよを告きり妙感のあり
るを一机をあいはる

秋といふ花いろ〳〵の葉小　角

替てよく洗内井戸の水　定良

蕨くり巣を立日より稲刈り　幾世

相撲わかひとくらべ　逸載　松風

新つるのよきをえらむ　溪石

右左ものの城の足場　角

二日

仲秋　行くひとの行くを向て

拭ひ笹よりも長一番ふり　角

蛛来て由ゆるまりの足　捅の百合　亀翁

森の風を心抱子のおどり哉　遠水

三日

そのかぎりを夕日を掘むけば　且水

江山をことりとりでよく岩て　金峰

卯花の乳母なる垣根　長崎　白蓼

市隅

西側の灯籠なれやみりの月　角

離宴の之明

不斷嵩乎　梵中

庭篁もまさぐる追ふんかな　筍深

読二大智度論一

除かれたまふこのうつのよみの白蓮花　同

一念

仲の露こぼれぬうちを千年　同

四月

五月

六月

こゝろこしをもちうることせしかれと　意うれしと

七月

秋の雨をとはるゝ

夏あひや物さびする脳の中　角

七夕や暮露すゝむ笛を　同

時なるあめうけ草や星の算　素見

名のつゝ無文婦世るる天の川　仙化

蝙蝠子風かよふばし祭　曲水

星あひや象ハ一つの葱畑　星東

ゆめうつゝ星合の宿よりけく有　青女

是会や人のうしろに衣着つ　溪石

蔦年を[illegible]の亀かなべ
[illegible]の孫ぐしうるへさ
車やなるとせるれば言下

何くとも色あぐん　是祭　是吉

三遷のかしこ慣ひて
ちりとなるを姪とるへ
つはせしられ一月あり
ちりもいとをしうして

文月や竜文字と母の恩　角

題張氏隠居

八月

金銀花氣をとしは秋の伶俐　麹風

夕鄙や半開しの八つの鐘　同

わしの若離や女の上乃も笑　訓女

石山幻住庵ハ芭蕉翁ゆ
徜徉せし所也ひとる佛
餉をよいしもとく

いつもさて蕗の葉盛の清佛餉　星東

幻住庵山上

木啄の柱をつく信濃の乱　曲水

山下[illegible]

物種よ小松よ風しるけ　曲水
蟬乃ゐる音ゝ入ぬやザンザ降　全峰
鵜とつれ鵜飼と眠る安めけり　氷花
暑のうち扇よあする暑さ哉　石鼓
自畫讃
いざ書て暑さ忘れん蚊の雲　亀足
ゑまんうち法の別る物ゝ千破

九日

十日　海鴉追曉雲

十一日　稲妻や朝曙しる夕　角
花うつしみる入蓮ハ枯ち
荷い分くその勞るうん
とうしよ誠切ゆるあるを
親と子も法ゝ心や蓮實　同
星合乃久休しや比丘尼　御所　揚水

生霊（イキヲ）酒のけぶらぬ祇園（フボテ）　角
人のよよく親秋の昏　水戸山口　半夏

乳母や余と[illegible]ん　土龍　臺次

十二日

義母義男灯籠[illegible]　角

夏ぬると咲くはなは相撲[illegible]　遠水

十三日

南乳の[illegible]詞[illegible]

北田の玉川よい西切上人

の堀井あると詞しに

濁る井も若葉のうつる秋の雨　角

熊蜂の[illegible]の[illegible]　湖雪

落葉くく賤ハうつるめよ業　同

出羽の玉山ゝとりの所も

山ゝや人這ひ[illegible]　仙化

十四日　分郎原

みを森や分限ヨ[illegible]る髑髏（ナカラヘ）　角

草村る飯[illegible]や蝶の[illegible]　翠風

秋[illegible]や肉さへつる髑　溪石

小[illegible]の出[illegible]の穴　角

玉川を我取夫の命　童次

むまつまうけを釣る帝帳　琴風

門並や箱枕灯ハ盆の中　溪石

妙法よ侍ん女玉よりう　裴洲

んさくうせ〜迷ふ

十五日

150

蕾の葉ハ赤い色紙を浪ぶ　角

荀子ハ其辭富而麗

自然の夜の牡丹の池　楊水

孟子之文直而顯

白雲やら〜〜と山猫　民

揚子之語簡而奥

木かく〜る斬の尾の長　同

十六日　陀羅尼品

銀を罪ふ秤や墓ゝ系　角

爪三年の回愁

亡し明ハ魂ハ墓の苔　仙化

亡親之日

孝養絶餓鬼　百室

地獄　落鄰や火振　鳴めよ水の色

餓鬼　子と抱る長者の門や立る灯籠

畜生　馬士も倒まし　ゆめく赤の露

阿羅　辻〻の切り〻〻きる西瓜外

人道　夏〻〻きき身を伝べや生身魂

天道　稲妻乃とづる笑ふ笑ふめ

聲聞　秋風や揺めきあぬ蝉の空

縁覚　蓮乃實や飛ぶものゝ〻〻

菩薩　躍子ハ母乃ふまる草の蔭外

佛

十七日

髮〻〻める男乃推つ〻き

ゆげめ〻〻る

西瓜〻〻奴乃髮乃流〻〻り　角

輪ゐんへく菓子　もの竹　探泉

等木餅りと文字なるかゞめる町筆ル　東ル

昼寝しへく袍とあてことゝ鶏飼ゐ　同

十八日

つぼゝも見たる高めり庭の萩　角

形見もせいしき回り枕筆ゐ　里東

すゝもひとへく力くゝめる童ル　小僧　文松

宰人の肩とゞりもり秋の暮　近江　そめ

老信をまてを涼み辻せうゝ　戦竹

いろとをもゝあハ秋と張ゝり　東ル

立の日や海りしあもの味　亀翁

たま衛なくるりや犬のつゝ　半夢

もくの掃除ハひゝり柳ル　同

泣ゐもて菩立ゝとるゝ金蓑　野徑

散花の張弟も長雀うゝ　同

紙多を名案を恥なれ撲ル　岩翁

番組

三番三　さもとこそ頃ゆるめ華の酒　蕭山

高砂　松の葉もよろづ目出度門の雪

頼政　いさきよく赤摘色なる茶水か

東北　春風の毋屋の庭はむ時雨の音

五葉松　切立て大力の火とぼん岩の霜

三輪　泊瀬女と云ふ送る蚊をか

三井寺　くるる程狂ひて春の月

老松　松梅や夫婦色迫する　神の庭

十九日　蒲百

夏の風乃月日成もり毋の乳角

我を又ひ泣ん秋の蟬笛深

蟬の声諸虫の向ひ　千代哉　東

追加　四月五日のおてうり
つきてゝ伯る
七月廿一日コ舟三田忌なるまこは
智海師をとゝめのて墓誌
淺草一誓乳る念佛一堂

三人のあつる蓋し秋乃聲　角

月しく
三ともも灯籠一ツも明り　松風

市中閑居

幕やよしゝ見も
人ハ竹格子　角

閑興六哥仙

ゆく水や何なとゝ海る海苔の味　其角

籾乃茅立の堀江枫橋　溪石

人色なるの風ふなて　琴風

撿狹成乃はけの貝　角

さす月も輝く閻のよる　石

蜆をすつる扇屋も　風

数珠や獨詰会 降るる秋の雨 角

乙女 使の清盃 一徒 不

かく題なる方も讀まるゝ 風

借錢乞ハ酒のはなく 角

〻ど世ハ竜田の祢宜の れ 不

又ゝの桜も乃耳柿 風

狐着る狩人の乳 角

紀写乃琵琶のあるゝ秋 不

雪の中 風

鶯の番るおるる

其血ゝ一節ゝ芝 角

我ハ来て金拾ひる花の陰 不

二日の月成て雛町 風

鶏乃田舎相撲をなる 角

土器 係る擔ぎるの影 不

市墓への道こゝら悲まれ 風

妹ゝ移むちゝや貧しく 角

垢離場にて[illegible]者告る人の縁　石
[illegible]へてうの疱瘡　風
老楽の本卦にて[illegible]　角
いでそうたうよ勝徳羅　石
嶺の月何観進る舟を　風
秋の渦まく上鵲乃衣　角
むつ内る法[illegible]天津屋　石
まれいこ心[illegible]ゆるを勘當　風

225

老功もあさひ[illegible]軍して　角
霜の八重まるむ尻　石
冬の倡の竹のむもくと　風
せそ[illegible]延をうつる　角
すり針や近江の[illegible]　石
着やかるる近八　木曾の[illegible]　乱

[illegible]

石山幻住庵を

[illegible]

曲水

郭公背ゆ[illegible]

那須よ山をつむ夏草其角

馬峯

羽人のさくらもとゝ[illegible]

同

急ぬかゝ味をたゞる冷食水

夏よと隅をとりぬ[illegible]

同

年ゆく秋　大嶺會し角

賜はしる名田を唐うとこへて　水
子の母とりる母の餅はく　角
鑓梅乃茶のかゝりとゝ乱れる　水
七つ拵ひすず菩提所のうゑ　角
数本車二つのけるる長柄ハ　水
花の都を　田舎也　角
所汁まつ紙ゆちりや機嗣　水
舅の役とゝんゆるゝ　角

[illegible]の馬より下る番代り　水
いつ所に風ないとく　蕨　角
まれ人る酒買つゝとく　水
さてよい身ほうく居る也　角
長寿る藝者ゝ[illegible]ゝ　同
茶をとゝ[illegible]簾中の秋　水
250
は意を見の合無と作平　角
立る額のもえぬ氣の毒　水

居士号ゝ衣い深く袖の色　角
六浦の海の曙の月　水
くもゐくもゐ海すり移るひろい上　角
月日の祭具足ん地　水
何者ひとりの屋　角
つゆもしく富士の白雪　水
月新たと鳥の声や成ぬん　角
強ひ不ゝ海の遠ゝ落る龍瞻　水

振袖の羽織掛る露の上　水
ケまゝゝ子細を聞の明井　角
景清ゝ道のゝ遠い夢もれ　同
ものの巾着ゝ小剛角折　水
分別ゝ遠ゝ花ゝ心一言　同
扇ゝ蝶のんゝ　角

花に終して辛なく
まかりけるに千那亭にて
休ひたる所兵
艸毛のまれに深き撫子ソ　珎夕

蚤虱の傍さ払はるる旅の
日数のそひとくるし別れ色
同じいやらし哉しも　秋香

一夜になよらへ以と我翁
乃いつまして今朝に咲る葉
とるあらんもうなの涼しき
るれ筆のことぞ多くれ　其角
筆しとされ陰笠やうろきに下涼　トホ
蝉になまゆる声のさびしさ　粛山
いまく蝉ほと只都る風を見て　彫棠
言の葉も寄る罾を着て臥し　角

刀京ハ銀治うまるるが　山
まる裁（ウエ）飛うう模（子）を作る　同
盗人と吾名よくれん里の　堂
ゆくる甲斐もあるも法談　同
傘（カサ）やなとちうよ材木　自
紋尺知しる書う提灯　同
うまるを作る思ひ　山
早欲ようも心さうなる　同

死さるハ人ありうを洞て　堂
くまくさうす尾の升筆　同
神るまくあ風さよ雀のる　角
看る打つく絶ますむ　同
万歳る身ハ下長春乃月　山
ふるふるふうまいん　同
十
二人しかるとうの袋（ホウ）ぶり　堂
梶ふ足乃惜きい毋　同

金箱を包まんとすれば寒　角
まさる乃塔を成ぬしたる花　同
双六の石と簺との三十餘り　山
孝あり城るさのむ古郷　同
横川まくみの高きる葉の色　棠
出家なしくく孫しく寵ん　同
うき月やむ法華を聞くも　角
作ミ多る椿早梅　同

山里乃去を思さめ東乃礼　山
毋てよ節なしく初蝶　同
家物をつくもれくも花の雲　棠
遠侍る同んん艸乃名　同
はし蛍乃口すぐる溜り水　角
水よとむ　蝗乃うゝ　山
今切とつとふる道るも暮て　角
竜胆とろしや白き食米　棠

呈餞

安房の海奉りきり汗拭　彫棠

そ遠

名月の海乃て思へ西の海　蕭山

豊岸の月かしむ夜こを　棠

みしらの夜

六月十一日

366

咲よなよ水乃粉ふれ車僧　卜宅

夕立けよ池乃珠ひ寺扇

鄙路の月を見こぐらよ息切（イキ）ゝ　柴雫

袴（ツヘトル）　袋せはよ平蕈宅

茅薄牛一乃地祖ふれ也　角

何ふらはえ雪の関守　辛

遠金ある家つまとる　宅
凡十分なひとり　盃　角
貧ゆへ（ヘン）なる結乗り繞ハさしの　京
変化（ヘンクワ）とりよ条ハ窄人　宅
夜の両燒食二つまぎせて　角
注くまの　京
下鑁子結ひ后ゑる忘草　宅
小夜あと秋のあ　盃

乳房ある千鳥ゆんとさハる　京
名月は酒むく人　宅
かくや姫ゆへせとあまむる　角
桃ゆあ　京
蜂の巣ハうるはきもの　宅
一ツ時責の市馬　角
薬龍とものぎ　京
めるてかさり　宅

宮川うちべるやの紙　角
稲妻より色さらし　刺刀（カタナ）　京
四ツ五ツのかるかる箱　宅
人を買せてあるの紙珠　角
色外るみちの古那（ヨ）　京
柄（ヘイ）うちやくく扇をしぼる　宅
赤の料やきかいるさ門　角
人うひ犬う乳ぬこの犬　京

灯（ヒ）とよせてくる丈をさる頬（ツラ）の皮　宅
うきき恋泣る所のるれ　角
人もものもきの外（ムカ）の鮮（スガ）の花盗　雫
遠巣　嶋巣の小鮎くせて　宅
甲斐歌やさやうよ　その月　角
神さびうすむ　總（ソウ）一の宮　雫

七月十三日

橋上吟　且水

夢のうちはしらぬ　乗夏て　花火船

とゝろ相撲を祇園の家　滝森

夕月の湯の色ちゝろ　竜翁

漂ひて

七月十九日半時　其角

役ら迄く坊主迄ゝ迄れ撲

秋を涼しく畳　臺安　遠水

湯次第して回す新酒の徳俺　岩翁

下ゝ迄ゝ焼火ゝ雲の月　角

州の戸鉄氷柱ゝ重て輾の音　水

市を囲ゝて続ゝぬ町　翁

我方ゟ吉き佛拝申（モリ）　角
家ゟ仕ハぬ之のこと　水
白ゟ流ゟ皆（セナカ）をかこつ　翁
盲（メクラ）ゟ見ゟ見ゟ　角
こすひゟ見ゟ舟の数　水
水施餓鬼　翁
鰹切る小磯ゟ秋の風　角
貸出し　三黒ゟ馬　水

我年ゟ娘ゟ出　翁
恋ゟ恋ゟ　角
王城ゟ付てゟ八重の花　水
稲ゟの茶屋ゟ　翁
うなひより乳母ゟ恋む（テニヲ）　角
見ゟ見ゟ　初蝶　水
暖簾を巻上ゟ　翁
ゟゟ　翁

同くハせる亦てまゝする菓の酒　水
月ま表僧のもと乃名と向　翁
此度も也湾迄の浦伝ひ　角
親も親も沙分る飛戸　水
精をの椀ハ禁ぶる村の紙　翁
一藝ぶるる人を感應　角
をのゝ氣の深入ぬる雪の声　水
妻乃種さ（も）安き世　翁

ゆゝ屋の狸の穴とゆるせて　角
所も變せ十のるる代子　水
雨氣つく日ハ圓炭もはる　翁
物ゝ ゆるするの門前　角
花の時汝ち人井戸ハ坂の下　翁
ほゝ蟲（ワコ）く
やとりまの虫　水

偶興

秋[illegible]と板戸の開音　岩翁
送中経[illegible]を念仏の　亀翁
蓬[illegible]むるもめる[illegible]　遠水

宗祇の[illegible]
[illegible]

仙化

亦一度蘭[illegible]までの夜寒哉
月[illegible]り庵の[illegible]　十用
[illegible]近き梨を[illegible]　百里
武士[illegible]の[illegible]　化
[illegible]と[illegible]　角
いくつの[illegible]市　里

むさくとるしき齋（トキ）と
くろひるる
人もしなし墨を惜む（モノオキ）丈　角　化
うちつけよくく男を　船　墨
青屋の涓　船（ツル）の盃　化
いつとけ井の輪の水柱の色　角
管（ヒサ）は〳〵足履（アシヒタ）んぬく　マ
十分の盛をアんせん毒の乳　化
焼（ヤキ）あてく寂む山く　角

釘〳〵建立る人もあり　星
能乃古文る眠（ナレ）る船る　化
旅する出る揚屋の月をアて　角
400
肌〳〵をさする　秋風　マ
新しい鰹なり〳〵る松茸　化
くろい潮よわる乳の形　角
村肝（キモ）乃喧嘩ハ時乃とまりて　星
黒いうろくろ〳〵る　化

あなたを割り茶碗をとつくり　角
斤の新なる恋のあつらひ　星
はくくと枝なる事を老者（ダニリ）　化
夜乃更捐る鞆てぐらり　角
月雪も九方の切とを枕なく　星
針立の　赤のいとなこ　化
斤かなる聖乃文字を徙（ハリ）つけ　角
辛（バイ）雪よくて奉りかるもの　星

地祭の竹の尾も常なる　化
鞠をとりて皆志つる也　角
十坊乃さゝる門ハ鈴（レイ）の声　星
玄の林を　鶏乃家　化
樂せんとおもひ旅乃花鬘　角
笑ふるこゝや山ハさめうら　星

花摘集　山田筍深跋

孝者德之基也儒家有孝經佛氏有恩重経佛母子之有親也懷老牛舐犢之愛況斷猿叫子之恩猶羔有跪乳烏有反哺況亦於人乎于茲武陵晋其角元禄萬年之三四月佛生日遇母八公之諱日偶詣石廟嘆戚頻起注血横斜捻香擢英挑一灯咏一唫以供聖壽之追福積日瀉月

向冀換百葉也今幸慣摩耶報
恩之緒縁集一隻百吟名曰花
摘也記其傍者皆是助餘哀者
也嗚呼角子寄思風月遊心滑
稽花中轉鶯唇机林敲鹿腸遠
追祇公之薫業近没芭翁之支
流矣闘國許之成世之棟梁噫
夫叔子有墮淚之碑其角有花
摘之集和漢雖易地其機亦一
也予閲其集感其情而採毫於

東武之旅寓

元禄寅年歳上秋下旬

其角撰　　寶井其角

一みなづき　二冊
一猿みの　二、
一ちの袋　二、
一花はなみ　二、

書林西村載文堂